

留学生の意見文にみられる非一貫性の原因と その推敲の方法に関する考察（上）

齊藤 真理子*

A Study of the Measures to Improve the Coherence of the JSL Students' Writing Part 1

Mariko Saito

要 旨 文化系の学部で学ぶ留学生は特に自分の意見や考えを一貫性をもって述べる力を養わなければならない。本研究では、留学生の意見文¹⁾を分析し、一貫性が損なわれている原因を調べ、全体構成に関する問題4点と段落構成に関する問題2点を特定した。これらの問題点を学生本人に分かりやすく提示する方法について考察し、以下の方法を提案した。

1. 結論に問題のあるもの…主題文、序論、結論を書き出し、見比べる。
 2. 例証に問題のあるもの…読み手に訴えたい内容に波線を引く。
 3. 話題が流れているもの…文話題構造分析を行う。
 4. 課題との関連に問題のあるもの…課題と主題文、主題文と結論を書き出し、見比べる。
 5. 段落の切り方に問題のあるもの…文話題構造分析、文章構成の要素を書き出す。
 6. 段落内が不統一なもの…段落話題を書き出し、それぞれの文と見比べる。
- これらの方法を応用して、学習者自身に推敲させた結果を次回報告する予定である。

I. わかりやすいレポートに必要なもの

大学で学ぶ留学生には、日本で生活し、日本人とコミュニケーションを図るための日常会話のみでなく、講義を聴いて理解する聴解力、教科書や文献などを読んで理解する読解力、質問や発表などを行う会話力、自分の意見や考えを文章で表す作文力など学問分野での探究を行うための日本語力が必要とされる。特に文化系の学部で学ぶ学生は、レポートや卒業論文で、自分の意見や考えを明快に述べる力を養わなければならない。考えを文章で表すことは母語話者にとっても高度な知的作業であるが、留学生の場合は、それを母語以外の言語でしなければならないのである。

留学生のための日本語表現法を担当し、その授業の中で、考え・意見を述べる意見文を書かせる時、一つの話題について書いてはあるのだが、その話題に関する様々なことを次々に書いているために論旨の流れが分かりにくいもの、それぞれの段落の関連が稀薄でバラバラな印象を与えるものに出会うことがある。本人にまとまりのある長い文章を書く日本語力がない場合はある程度やむをえない面もあるが、文法的な誤りは少ないのに、全体で何を言いたいのか分かりにくいものも数多

* 本学専任講師 日本語教育

くあるのである。

このまとまりのなさ、論旨の流れが一貫していないものは、日本人学生の作文にも認められる。森岡（1975）は、自由なテーマで書かせた日本人中学生の作文を分析し、主題が一つでない、途中で主題がそれるという欠陥や主題が一貫して論理的に展開していないという欠陥、また、段落の意識、段落の統一、段落の構成に関する欠陥を報告している。

このように、論旨の流れが分かりにくかったり、一貫していなかったりするものは大学で必要とされるレポート・論文などを書く上では致命的である。日本人対象のレポート・論文などの書き方に関する本では、一番大切なものとして「しっかりした“まとまり”のある文章」（三樹）「文章がなめらかで流れるように読め」「分かりやすくリズムカルな文章」（岩城）「一本の太い糸が通り、文章全体に『一貫性』が備わる（文章）」（言語技術の会）を挙げている。レポート・論文と同様に自分の意見を相手に分かってもらうために書かれる意見文では、特にこの文章全体の一貫性が大切である。

授業で、一貫していない文章に出会うと、「まとまりがない」「筋が分かりにくい」などと指摘し、書き直しをさせることになるが、どこをどのように直せば良いのかを学習者に示すのは教師の判断だけでは難しい。個人的に面談をし、何を一番言いたかったのか確認することが最良なのであるが、クラス学習では一人一人との個人的な面談の時間はあまりとれないので、「具体例を書くともっと良くなります」「結論が全体で書いていることと違います」などと構成に関する部分的なコメントのもとに、第二稿を書かせている現状である。

同じ文章の誤りでも文法性についてはもたなくなっている文型、または呼応で必要とされる表現などを示すことにより、問題点を学習者に明確に示すことができ、誤りを学習者が理解し、誤りによって学習することが可能である。しかしながら、文章全体を読んで持つこの「まとまりがない」という感じを伝えるのは難しく、学習者もどのように直すべきか分からず結局部分的な改変をするにとどまってしまう。

作文でもレポートでも書きたくて書く場合ばかりではないので、書き手の側で考えがまとまっていないままに書き始めている場合があると思われる。学習者が自らまとまりのなさに気づき、考えを深めながら推敲していけるようにする方法はないものだろうか。本稿では、学習者が全体を視野に入れながら文を推敲し、一貫性の保たれた文章が書けるようになる方法について考察する。

II. 一貫性とは何か

II-1. 一貫性とは何か

Halliday & Hasan(1976)は一まとまりの文章になっているかどうかに関する母語話者の直感は、文の集合に texture があるかどうかによると考え、texture は、指示語・省略・語彙的手段・接続表現などの cohesion（結束性）によりもたらされると提唱した。texture は、結束性によるものみではなく、「主題」と「叙述」、「既知情報」と「新出情報」などという文構成の texture、そして文章全体の texture もあると述べている。一貫性はこれら第二・第三の texture と関わりがありそうだが、それらの分析は十分に行われていない。しかし、彼等の画期的な研究以来、結束性を作

り出す要因の研究は盛んになった。

近年、結束性に関わる文法項目の研究のみでなく、テキスト全体を客観的に分析しようという試みも現れてきた。(Wikborg, 1990; Cerniglia et al, 1990; Conner & Farmer, 1990; Hoey, 1991)。その流れの中で、coherence（一貫性）の定義が模索されている。

cohesion はテキストの表面に表れた特徴ととらえる見方が一般的である (Enkvist, Hoey, Reid) が、coherence に関しては、一貫した全体像を築く性質 (Enkvist)、読み手の判断評価 (Hoey)、談話の中の文を結び、読み手にとって意味あるものとする構造に潜んでいるより幅広い概念 (Reid)、読み手にとっての論旨の糸 (Wikborg) など表現の仕方は様々である。これらの coherence の定義に共通していることは、Hoey (1991) が述べているように、内容が読み手にどう判断されるかということである。また coherence は読み手の側の理解によるために、読み手の文化的背景・知識によって補われる部分があることも知られている (Lautamatti, Hinds)。

留学生を書く作文について考えると、読み手は日本人教員である。日本人が読んで、一貫性が損なわれたと感じる部分を留学生に客観的に示すことができれば良いのである。では、日本人の読み手にとって一貫しているとはどういうことをいうのであろうか。

II-2. 一貫性のある文章とは何か

日本の作文教育では、従来分かりやすい文章を書くためには「起承転結」「序論・本論・結論」に合った文章構成にすることが奨励されてきた。そして、それらの型をさらに細かく分類する試みとして、感想文・説明文・レポートなど各種の文章にあったより良い文章構成の型に関する考察 (大熊, 1970; 木原, 1973; 樺島, 1983)、説得力のある文を書くための基礎となる材料の提出順序の型に関する考察 (木原, 1973; 森岡, 1977; 西田, 1979; 樺島, 1983) がなされてきた。

このように、文章全体を視野に入れた研究が多かったが、近年、英語のコンポジション教育の影響から、文章全体の構成要素として段落を重視する考えが一般的になり、文章を一貫させるにはまず段落をしっかりとさせることが大切であると言われるようになった (鈴木, 1989; 森岡, 1989; 言語技術の会, 1990)。

これらを参考に考えてみると、日本人の読み手にとって一貫性があると感じられる文章の第一の条件は、文章構成がはっきりしていることである。ちなみに、ドラマ・小説などが文章展開の意外性を狙う「起承転結」で書かれることが多いのに対して、論説・評論などの論理的な文章は、「序論・本論・結論」で書かれるのが基本 (河村ら, 1979; 西田, 1979) である。第二の条件は、材料が論理の流れにしたがって読み手に分かりやすく説得力を持って提出されていることである。さらに、材料が、一段落一話題 (言語技術の会, 1990) にまとまっており、全体の文章の中での役割がはっきり分かることが望ましい。

留学生の作文が、上記のような構成になっているか否かを客観的に示すための方法を考えるために、次にあげる研究を参考とした。

II-3. 一貫性の分析に向けて

II-3-1. 非一貫性の原因について

Wikborg (1990) は、144種のスウェーデン語から英語に訳した論文の一貫性の損なわれ (coher-

ence breaks) の原因を分類し、どういう種類の原因が多いかを報告している。大部分の考察は、段落換えの問題に関してであるので、他の原因の詳細については不明である。

Hinds (1990) が示唆しているようにそれぞれの言語・文化により、一貫しているとされる文章構成に違いがあるとすれば、訳された論文の一貫性を判断するという手法に疑問は残るが、今回の研究でもまず Wikborg のように一貫性が損なわれる原因を抽出することが必要である。

II-3-2. Topical Structure Analysis (文話題構造による分析) について

文話題構造による分析は、文話題と談話の話題の意味的關係に焦点を当てテキストの一貫性を明らかにするもので、Connor & Farmer (1990), Cerniglia et al. (1990) がこの方法を使った研究を報告している。方法としては、テキスト全体の話題を意識しながら、文レベルの話題を決めていき、文章の展開を吟味するものである。文章の展開の仕方には、parallel (並列)・sequential (継起)・extended parallel (広範囲での並列) があり、並列では、文話題は同一か類語となり、継起では、異なったものとなる。文話題表の記入は、並列の文は、すぐ下に語頭を揃えて記入し、継起の文は2文字ずらして書く。広範囲の並列では、前に提出された同一話題の下に記入するので、前出の話題に戻ったことが、文話題表には表れる。

Connor & Farmer はこの方法を英語学習者の文章推敲の手段として用い、効果があったことを報告している。日本語の文章に応用した場合には、まず、主語の省略が起きるので、何が文章話題かを決定しながら文章に下線を引く作業のときに、文章上には表れていない場合があるという不都合がある。また、その決定自体も文章全体の話題に照らして直感により判断するのであり、必ずしもその文の文法上の主語ではないのである。文話題判定に関して判定者間に高い相関が見られたことが報告されているが、留学生がどの程度たやすくできるのか疑問が残る。また、Connor & Farmer の論文では、extended parallel を入れたことにより、焦点がはっきりした事例や、sequential が多すぎて散漫な印象を与えていた文章が sequential と parallel のバランスを考えたことにより展開が良くなった事例が報告されているが、文話題表を見て、どこにどのような問題があるかを探るのがどのくらいたやすいかにも疑問がある。

しかしながら、話題が次々に移っていき、元に戻らないという欠陥はこの方法を利用することによりはっきりと見えてくるものと思われる。

II-3-3. 文章を構成する要素について

樺島 (1983) は、文章を読むときには時間的順序で読んでいくわけであるから、それぞれの要素が並ぶ順序に良い文章の型と見なされるものがあるはずであるという立場から説明文・感想文・意見文などの文章構成の要素について考察した。そして、それらの要素の配列を生かしコンピュータで、文章作成を援助する試みを紹介している。

意見文を述べるときの良い文章の型の例も言及されており、その要素として、事実の報告、説明・解説、導入、結び、問題提起、問題解決、意見・感想を述べる、例示が挙げられている。ここで、導入、結び、という項目は、文章構成の中での段落の位置づけである。例えば事実の報告や問題提起が導入になるのであるから、学生の作文の要素分析としては、文自体の機能と文章全体構成の中での機能を分け、導入・結びは入れないほうがわかりやすいであろう。

Ⅲ. 留学生作文の非一貫性の要因

留学生の意見文の一貫性が損なわれる原因はどこにあるのか調べてみよう。今回分析の対象としたのは、大学3年の留学生対象の日本語表現法という授業で書かれたスピーチ原稿13本である。皆、日本語学校での一年間の授業とその後の大学教育で、一応全員まとまりのある文が書けるレベルになっている。留学生は人数の多い順に台湾、中国、韓国からの留学生であるが、ここでは書かれた文章の分析にとどめるので、国籍は問題にしなかった。

スピーチは、人前で話すものであるため、文体は、です・ます体となるが、文章としては、意見・主張を述べる意見文である。スピーチで最も大切なことは、主題を終始一貫して追求し、無関係な要素は含めないようにすることである（言語技術の会、1990）。話の組み立てとしては、序論（主題の提示）→本論（主題の展開―主題に対する詳しい解説と例証）→結論（主題のまとめ）の3段階構成法で指導した。スピーチ原稿を書くのは授業内では2回目で、どちらも与えられた課題から主題を考え、主題文を書いたところで教師が相談に乗り、一分間スピーチの原稿（600～800字）を書くという手順で進めた。第二稿まで提出させたが、今回は第一稿を分析した。今回の課題は「国際化と私」であった。

分析の仕方としては、まず、全体を読んでみて、一貫しているレベルにより4段階に分けた（一貫している・まあ一貫している・あまり一貫していない・一貫していない）。次にどこに原因があるかを吟味しながら読み、原因となっていると思われるものを書きとめた。13本の原稿を吟味した結果は表1の通りである。

一貫していると判断されたものは5本あったが、その中の3本はあまり説得力のないものであり、その一貫性は他の2本に比べて希薄に感じられる。

Wikborg（1990）は、非一貫性の原因として、多い順に、1. 不明確な推論、2. 段落の切り方、

表1 一貫性のレベルとその原因

一貫性のレベル	一貫性が損なわれた原因
一貫している 5 (説得力ない)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の体験した例に裏付けされた分かりやすい主張となっている。(2) 例証が月並みで、書き手の体験ではない。 例証がないため、説得力がない。(2)
まあ一貫している 2	<ul style="list-style-type: none"> 結論部にそれまで述べてきたこと以外に言いたいことを述べているため、全体で言いたいことがぼやける。 結論部が独立していないため、全体で言いたいことが分かりにくい。段落の切り方に問題がある。
あまり一貫していない 3	<ul style="list-style-type: none"> 結論が課題と関連していない。 課題とまるで関連づいていない内容になっている。 例証が何を言うためのものか分かりにくい。矛盾した情報が一段落の中にある。
一貫していない 3	<ul style="list-style-type: none"> それまで述べてきたことは別のことが結論に書いてある。 結論が飛躍している。段落の切り方に問題がある。 話題が流れて、二つの主要話題がある。

3. 文接続の間違い, 4. 話題の流れ, 5. 不明確な話題を挙げ, 2. と 4. と 5. を話題と構成に関わる問題として, 1. と 3. を結束性の問題として分類している。

今回の留学生の書いた作文の分析では表1のように, 結束性の要因が全体の一貫性に大きく影響を与えている例はなかった。これは, たとえ接続語の使い方が違っていても, 全体の意味の流れから文同士の関係が読み手に分かるために一貫性を損なう原因とならなかったためである。

原因を分類すると, 表2にまとめたように1. 結論に問題のあるもの, 2. 例証に問題のあるもの, 3. 話題が流れているもの, 4. 課題との関連が全然分からないものというように全体構成に関するものと, 5. 段落の切り方に問題のあるもの, 6. 段落の中に矛盾があるものというようにもう少し部分的な, 段落内部の問題に起因するものの2種類に分けられた。さらに, 5と6は, 表1を見ると, それだけで一貫性を損なう原因となっておらず, 付随的な原因である。

表2 非一貫性の原因の分類

全体構成に関するもの	
1	結論に問題のあるもの…5例 結論に論理の飛躍がある。…(1) 結論がそれまで述べられている内容と違う。…(1) 結論が課題と関連づいていない。…(1) 結論に本論で述べていないことも書いてしまっている。…(1) 結論が独立しておらず, とても短い。…(1)
2	例証(エピソード)に問題のあるもの…4例 例証が不十分で説得力がない…(3) 例証の位置づけがはっきりしていないもの…(1)
3	話題が流れているもの…1例
4	課題との関連が全然分からないもの…1例
段落構成に関するもの	
5	段落の切り方に問題のあるもの…2例
6	段落の中に矛盾した情報が入っているもの…1例

では, それぞれの問題点に関して詳しく見てみよう。

Ⅲ-1. 結論に問題のあるもの

結論を書くのが難しいことはこれまでも指摘されており, 森岡(1975)は, 日本人中学生の作文を分析し, 書き出しに比べると, 結末はほとんど不完全であると報告している。そして, はっきりした結びをつけさせることによって主題意識を呼び起こしたいと提言している。鈴木(1989)は, 論文やレポートの場合は, 書き出しや結びはそれ程難しくないとしながらも, 感想文を書かせる時, 書き出しと結びでは, 結びに問題が多く見られると述べている。そして, 書き出しと結びとは関連させて指導するほうが適切であると示唆している。

結論は, 最後の段落に述べられるものである。外国語では, 読んだこと, 書いたことが記憶に残りにくいことを考えると, 主題文及び書き出しを結論のそばに書き, 書き出しとの関連, 主題との関連を吟味させることにより, 学習者自身でズレを感じるようになるのではないだろう

うか。

〈例1〉²⁾

主 題 文：日本語の学習が世界各国でブームとなっています。日本国内の日本語学校もたくさんあります。だから日本語が国際語として普及しています。

日本語学校は一つの国際社会である。(訂正後)

書き出し：留学生は日本にきたらまず一年間とか二年間もっばら日本語の研修をしなければなりません。日本の各地にこのような外国人のための日本語学校がたくさんあります。

結 び：今、日本語の学習が世界各国でブームとなっています。特にアジア人が多いです。これからの日本語は国際語として普及していくでしょう。

例1の大きな問題は本人が最初に書いた主題文と、全体で本人が述べていることが食い違っていることである。第一稿を教師が読んで主題文を訂正したが、全体で何を言いたいのかははっきりと認識するのは学生にとってかなり難しいようである。

書き直した主題文、書き出しともに日本語学校のことについて述べているにもかかわらず、結論は、日本語のことになっているのが分かる。この時、文話題に下線をつけるとさらによく分かる。この結論の部分を、例えば、「日本語学校は日本語を教えてもらうだけの場所ではなく、いろいろの国の人と出会い、いろいろの文化に接することのできる小さな国際社会である。」とすると、全体の一貫性がかなり増す。

Ⅲ-2. 例証に問題のあるもの

主題をより説得力のあるものとするための例証に問題のあるものが合わせて4例ある。これは何を読み手に説得したいのかという点がはっきり認識できれば改良されるのではないだろうか。何を説得したいかという部分に波線をつけてみたらどうだろうか。例2は、国際交流は日常生活の中にもあることを示す例証の段落であるが、多くの国の人々と知り合ったり、日本人の生活ぶりを見たりというだけでは説得力が弱い。もっと具体的な例証が必要である。

〈例2〉

実際に、日常生活の中で、国際化と言えることがたくさんあると分かりました。例えば、日本に留学する間、多くの国の人々と知り合いました。特に、去年の五月、学校の地域研修でホームステイの体験がありました。実際に日本人の家庭に入って、普通の日本人の生活ぶりを見て、自分も家族の一員になったなあと思いました。この様な日常交流は国際化の一つだと思います。

Ⅲ-3. 話題が流れているもの

話題が違う方向へ流れている作文は、ここでは一例のみであった。大きく二つの話題に分かれている例で、長くなってしまうので引用は避けるが、文話題構造分析により話題を書き出せば、話題が流れていることが分かるはずである。例3は、91年度の学生の作文の一部である。国家間の関係を良くするためには、経済、文化、国民の交流が必要であると述べている。ここで、米国大統領が来日したという事実は、それくらい貿易関係が両国の関係に重要であるという例証のためなのであるが、大統領の仕事に関する話の流れに流れている。

〈例3〉

1) アメリカとの米の問題、車の問題がある。2) 日本は米が多い生産しているし、仕方がないので、米国か

らも米を輸入しなければならない。3) 車も同じである。

4) 先週、アメリカの大統領が来日、両国の経済などのことについて談話した。5) 一時、大統領は疲労で倒れてしまった。6) 国の代表者の仕事がとても大変なのだ。

〈文話題構造分析〉

- 1 (日本)
- 2 米
- 3 車
- 4 アメリカの大統領
- 5 大統領
- 6 国の代表者の仕事

Ⅲ-4. 課題との関連に問題のあるもの

今回の分析で課題との関連が全然ないとされた作文³⁾は、それ自体では一貫しており問題はなかった。しかし、書きたい内容を無理に課題に合わせようとしたために一貫性がわかりにくくなっているものも他に見られた。

〈例4〉

主 題 文：夏祭りで皆国籍に関係なく、同じ仲間になった。一生忘れられない経験でした。

書き出し：三年前、まだ日本語学校にいたとき、始めて神奈川県の湯河原でホームステイをしました。ちょうど8月ですから、日本各地で神社を中心に夏祭りが賑やかに繰り広げられますが、もちろん湯河原も例外ではありません。

結 び：留学生の皆さん、留学している間に是非一度ホームステイに参加してみてください。きっといい思い出になると思います。

この主題文は本人が書いたものだが、課題を意識して、夏祭りのときの一体感に国際化社会を感じたというような内容になっている。作文の内容も夏祭りの描写とパレードで感じた一体感が綴られている。しかし、結びでは、多分本人が本当は書きたかったホームステイに視点がずれてしまい、一貫性の多少欠けた印象を与える。

このようなズレは課題と主題文、主題文と結論をよく見比べることにより、客観視できるのではないだろうか。

Ⅲ-5. 段落の切り方

段落の切り方に問題があるということは、同じ段落に異なる話題、または異なる視点の文が入っているということである。異なる話題が入っているものは、文話題構造分析により話題を書き出していても、継起としか見えないだろう。

けれども、樺島(1983)の提案した文章構成の要素を利用し書き出してみると1文から5文までは事実の報告であり、6文は意見であることが明らかになる。意見を述べるときにはこのように事実の報告と組み合わせて述べるのが普通であるが、樺島も述べているように事実の客観的報告だけでは、受け手の理解が得られない場合には、説明の叙述を加える必要がある。例5では1～5文の内容を次の銭湯の役割に関する文につなげるための説明が必要である。または5文と6文の間で段落を変え、銭湯の役割に関する段落を作っても良いかもしれない。

〈例5〉

1) 外人の私は、椅子に座って、シャワーを浴びたまま、髪を洗いました。2) すると隣のお婆さんは私に不満な顔をしました。3) シャワーの水は隣に飛び込んだんです。4) 「すみません。」と謝りました。5) 「外国人ですか。どこから来ましたか。」ってお婆さんは優しい声をかけてきました。6) 日本の銭湯は単にうちにお風呂のない人々のための「入浴場」ではなくて、一言で言えば昔から町の人々の「くつろぎの場」であり「人と人の触れ合いの場」ですので、だんだんその数が減っていくのは残念だと思います。

〈文話題構造分析〉

- 1 私
- 2 隣のお婆さん
- 3 シャワーの水
- 4 私
- 5 お婆さん
- 6 日本の銭湯

〈文章構成の要素〉

- 1 事実の報告
- 2 事実の報告
- 3 事実の報告
- 4 事実の報告
- 5 事実の報告
- 6 意見

III-6. 段落内の不統一

段落内の不統一の見られた例は、意味的なつながりの問題なので、文話題構造だけでは見えてこない。その話題についてどのように述べているかを書き記すことが必要である。

〈例6〉

1) 例えばタイ料理はすごく変わったニオイが出るので慣れていない人には嫌われるに違いないのになぜ、食べ終わったら窓を開けようと思わないだろうかと思いました。2) またリビングで勉強したりして自分一人がリビングを占領してしまうときなど、どうして私は遠慮しなければならないのだろうかと思いました。3) 不満が高まっていくうちに、もしかして無視されているかもしれない、嫌われているかもなど感じ始めました。4) けれども、仲が悪いわけではありませんでした。

〈文話題構造分析〉 段落話題：いろいろな不満

- 1 タイ料理の匂い
- 2 リビング
- 3 不満
- 4 仲 ? 仲が悪いわけではない

例6では同居していた友人に対して実はいろいろな不満を感じていたということを述べている。全体の文章の中では、この段落は筆者が当時相手を理解しようとしなかったということの例証であるので、4文を段落の最後に書くと段落自体が一貫していない印象を与えてしまう。もし、4文の内容を言いたいのであれば、「私たちは仲が悪いわけではありませんでしたが、いくつか彼女に言

えない不満がありました。」と言うように前おきとして書くべきであろう。

このようなズレは段落で言いたいことをはっきりと書くことにより見えてくるのではないだろうか。

以上、留学生が書いたスピーチ原稿の非一貫性の原因を分析し、その原因を目に見える形で示す方法について考察した。それぞれ表3のような推敲方法で、本人に分かりやすい形で提示できるものと思われる。

表3 非一貫性の原因を明示する方法

全体構成に関するもの	
1	結論に問題のあるもの… 主題文と序論、主題文と結論、序論と結論を書き出し、それぞれ見比べる。
2	例証（エピソード）に問題のあるもの… 何を検証するのか書かれている部分に波線を引く。
3	話題が流れているもの… 文話題構造分析を行い、話題の移りを認識する。
4	課題との関連が全然分からないもの… 1の表に課題も書き入れ、課題、主題文、序論、結論を見比べる。
段落構成に関するもの	
5	段落の切り方に問題のあるもの… 文章構成要素を書きだし、検討する。
6	段落の中に矛盾した情報が入っているもの… 段落話題を書き出して、矛盾している文と比べてみる。

IV. 第一稿の分析の試み

IV-1. 非一貫性の原因を明示するための手順

第三章では留学生による意見文を分析し、その非一貫性の原因を分かりやすく示す方法について考察した。これらの結果を実際に応用する手順を考えてみよう。

1. 主題文が、本当に全体の内容を反映しているものかを吟味する。しかし、主題文は、全体の基礎となるものなので、この点の判断には教師の助言が必要である。
2. 第一稿の課題、主題文、序論（書き出し）、結論（結び）を書き出す。このとき、特に結論に問題がないか調べる。また、それぞれの文話題に下線を引く。
3. 例証しようと思っている事柄に波線を引き、それが十分に例証されているか検討する。
4. 文話題構造分析を行い、話題が流れていないか調べる。長い文章の場合には、話題が流れている箇所を教師が特定し、その箇所のみ分析させても良い。
5. 段落話題を書き、段落内の文が矛盾していないか検討する。長い文章の場合には、矛盾の含まれている段落を教師が特定し、その箇所のみ分析させても良い。
6. 文章構成要素を書き出し、段落の切り方に問題がないか調べる。これも長い文章の場合には、問題がある箇所を教師が特定し、その箇所のみ分析させても良い。

第Ⅲ章でも触れたように、留学生にとって、何を一番言いたいのかを表すことはかなり難しいことである。内容を反映させた主題文が明快に書ける学生は一貫性のある文を書ける学生であると言ってもいいほどである。この1の作業は、何を言うために書くのか本人が考えを深めるために、そして、全体の一貫性を考える拠り所として重要なものである。

2は、課題、1で検討した後の主題文、序論、結論を見比べる作業であるが、ただ見るだけでなく、それぞれを書き出して、同一視野の中で見比べることがポイントである。外国語で書く文章は記憶にとどまりにくいものなので、再度書き出す作業に意味があると思われる。

3は、例をあげて具体的に訴えたい点に波線をつけ、それが具体的に説得力をもって例証されているかを確認する作業である。また、何を言うための例証だったかを書き手が追認する助けにもなる。

4の文話題構造による分析を行うためには、事前にやり方の練習が必要である。第Ⅱ章で述べたように日本語の文の場合不都合もあるが、それぞれの文を主題文との関連で考えていくという訓練にもなり有意義だと思う。自分の文の問題点が明らかになってくれば、学生も興味を持つであろう。

すべての段落について5の作業をするのは時間がかかる。まず、段落話題を特定し、それと矛盾する記述を指摘する練習をクラスでしてから、各自の文を読み返し、問題点を探させてはどうだろうか。

段落の切り方に関する問題は、他の原因とあいまって一貫性を損なっていること、それぞれの要素を特定するためには多少の訓練が必要なことを考えると、実際のクラスでは、余力のある学生にのみ課すことにしても良いかもしれない。

Ⅳ-2. 第一稿の分析の試み

ここでは、3学年の学生が、「最近考えたこと」という課題で書いた意見文の第一稿を上記の手順により分析してみよう。

〈例7〉

1) 最近、駅やレストラン、喫茶店、学校など、煙草を吸いながら歩いている女性たちに驚かされた。2) 日本は先進国であり、専業主婦からキャリアウーマンになった日本女性が増えてきた。3) 職場では男性と同じレベルの仕事をして、ストレスがたまっている事が女性が煙草を吸うようになってきたきっかけでもあるだろう。

4) 昔は女性が煙草を吸うことが偏見された。5) それは女性が社会にいる地位が非常に限られていたからだ。6) 子供や家族の世話、家事以外は何もできない専業主婦にたいして、現代の女性は主婦の責任を持ちながら、外で仕事をしなくては余裕のある生活ができないだろう。

7) ところが台湾の女性が煙草を吸うことが日本と違う点を見ると、台湾人の意識的には煙草を吸う女性が水商売、売春婦などのような仕事を持っている女性であると思われる。8) 思想的には女性が煙草を吸うことは決して上品なことではないだろう。

9) 一方、女性は喫煙すると、身体はどういうふうに影響されるかという点、女性が男性と違って子供を生むことができる。10) もし妊娠中に煙草を吸えば胎児に大きい影響を与えて来る。11) 将来、母親になる私たちが女性が自分の身体や子供の健康に重大な責任を持っているから、煙草に火をつける前によく考えよう。

12) でも、なぜ人々は喫煙ということが悪いと知りながら、なかなかやめられないのだろうか。13) 煙草がないと仕事ができない、煙草がないと落ち着かないというような考えを自ら反省しなくてはならない。14) 特に私たち女性が子育ての使命があるので、子供の教育や身体に影響しないように、自分の身体の健康のためにも、喫煙ということを真剣に考えたほうがいいじゃないかと私が思う。

1. 主題文は全体の内容を反映しているか？

全体で述べていることは、喫煙は良くないことだということなのだが、その主張が主題文に表れていない。これは、文章を書く前に本人の考えが十分にまとまっていないために起きたことだろう。

主 題 文：煙草を吸っている日本人の女性が非常に多いことに気づいた。(本人)

喫煙する日本女性が多いことに気づいた。喫煙は女性にとって良くないことだと思う。(訂正後)

2. 課題、主題文、序論、結論に矛盾はないか？

課 題：最近考えたこと

主 題 文：喫煙する日本女性が多いことに気づいた。喫煙は女性にとって良くないことだと思う。(訂正後)

書き出し：最近、駅やレストラン、喫茶店、学校など、煙草を吸いながら歩いている女性たちに驚かされた。

結 び：特に私たち女性が子育ての使命があるので、子供の教育や身体に影響しないように、自分の身体の健康のためにも、喫煙ということを真剣に考えたほうがいいじゃないかと私が思う。

第一稿を書いた後で見比べることにより、一体自分が何を言おうとしていたのか、考えを深めるきっかけになるのではないと思われる。この場合、4項目間に矛盾は認められない。

3. 例証は説得力があるか？

女性が煙草を吸うことが上品なことではないことを言うために台湾での受け取られ方があげられているが、あまり説得力はない。

4. 話題は流れすぎているか？

〈文話題構造分析〉

- 1 煙草を吸いながら歩いている女性たち
- 2 キャリアウーマン
- 3 きっかけ
- 4 昔
- 5 地位
- 6 現代の女性
- 7 台湾人の意識
- 8 煙草を吸うこと
- 9 (身体への) 影響
- 10 影響
- 11 私たち女性
- 12 人々
- 13 反省
- 14 私たち女性

この表を見ると、話題は発展した後「女性」に戻る構造になっており、話題は流れておらず一貫

しているように見える。問題になるのは、日本語の不十分さゆえに「煙草を吸いながら歩く女性たち」、「キャリアウーマン」、「現代の女性」と「私たち女性」を同一視しているように見えるところであろう。何について話しているのかが、微妙に揺れているので、焦点が曖昧となり、一貫性の欠けた印象を与えてしまうのである。

また、3文の喫煙のきっかけと、4文からの段落の関係が分かりにくい。この間をつなぐ試みが必要である。

5. 段落内に矛盾はないか？

第2段落を見てみると、段落話題が昔の女性に対する現代の女性なのは分かるが、現代の女性と喫煙についての言及がない。そのため、全体との関わりがこの段落だけ分かりにくい。ここは、現代の女性の喫煙に対する考えをはっきりと出した方がよい。段落全体で言いたいことがはっきりとしていないので、それぞれの文の関わりも分かりにくいものになっている。4. の分析結果も合わせて訂正を試みると次のようなものが考えられる。第2段落が何を言うためのものかもはっきりとして、一貫性が高まるのが分かる。

〈訂正例〉

3) 職場で男性と同じレベルの仕事をして、ストレスがたまっている事が女性が煙草を吸うようになってきたきっかけでもあるだろう。

しかし現代の女性に喫煙が多くなった理由はそれだけではない。4) 昔は女性が煙草を吸うことに偏見ももたれていた。5) それは女性の社会的地位が非常に限られていたからだ。6) 子供や家族の世話、家事以外は何もできない昔の女性にたいして、現代の女性は主婦の責任を持ちながら、外で仕事をしているのだ。女性の喫煙は現代の女性の自信の表れとも言え、格好良いと思われているのではないだろうか。

6. 文章構成要素の順序は適切か？

主 題 文：喫煙する日本女性が多いことに気づいたが、喫煙は良くないことだと思う。

- 1 事実の報告
- 2 説明
- 3 意見 (ストレスが喫煙のきっかけ)
- 4 事実の報告
- 5 説明
- 6 意見 (現代の女性は外で仕事をしないと余裕のある暮しができない。)
- 7 事実の報告
- 8 意見 (女性の喫煙は上品なことではない。)
- 9 説明
- 10 説明
- 11 意見 (女性は自分の身体や健康に責任がある。)
- 12 問題提起
- 13 意見 (煙草に頼る考えを反省しなくてはならない。)
- 14 意見 (自分の子供への影響、身体への影響を考え、喫煙を真剣に考えたほうがいい。)

ここでは、構成要素のみでなく、意見の部分で言っている概要も書き加えてみた。

段落の間に線を引いてみると、各段落の終りに意見が述べられており、事実の報告や、説明と意見の積み重ねという構造になっているのがわかる。意見の要約がその段落の言いたいことのはずだが、主題文にある喫煙は良くないことだという意見と照らし合わせてみると、前述したように6文が全体の中でどういう位置づけなのか良く分からない。

また、問題提起が後にあり過ぎる。問題提起は序論でなされるべきであり、結論部にあると一貫性を欠く印象となる。結論では、それまでにあげられた論点をまとめるようにすることが望ましい。

以上の6段階の分析により、一貫性が損なわれている主要な原因を学生に分かりやすく示すことができるものと思われる。

V. 今後の課題

今回行った第一稿の分析は、学習者の手によるものではない。談話構造分析の仕方、文章要素の判断など練習を要するものもある上、学習者全員に行わせるには段階が多すぎる感もあるので、今後学習者自身が推敲していけるようにするためには手順を考えていく必要がある。

本稿は、一貫性の損なわれている点を何とか分かりやすい形で学習者に示す方法に焦点を当てた研究である。とはいえ、一貫性があるかどうか、何が原因になって一貫性が損なわれているかの判断には他の母語話者の判断も必要であろう。また、留学生による作文の非一貫性の原因の傾向を探るための材料としたのは、13本の意見文であるので、この点に関してもさらに数多い作文の分析を積み重ねていく必要があるだろう。

上記の点の改善を図り、学習者自身による推敲の結果を交え、さらにわかりやすく一貫性における問題点を提示できる方法を探ることを次回の研究課題としたい。

註

- 1) 大熊(1973)によると意見文とは教育現場用語であり、意見を書いた文章をさす。そして、意見文は、論説文を指向している。論説とは、ある問題についての主張を論証的に述べ相手を説得しようとする文章であり、学術論文と共に論説文の一種である。留学生の書いている文は、論説文とは言えない段階のものが多く、それを指向しており、論文への足がかりとなる文章という意味で意見文を使った。
- 2) 例にある学生の作文は、学生が書いたそのままの形で引用してある。
- 3) この1本は教師との話し合いがなされずに書かれたものであるため、こういう結果になった。

参 考 文 献

- 池上嘉彦 1983「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育Ⅰ』国立国語研究所
市川 孝 1975「文章論」『覆刻文化庁国語シリーズⅩ 文章の構成・表現』文化庁
岩城之徳 1978「卒業論文・レポートの書き方」『言語表現法 文章の書き方と話し方』学燈社
大熊五郎 1970「どうすれば整った文章構成になるか」『国文学』15-2 学燈社
樺島忠夫 1983「4文章構造」水谷静夫編『朝倉日本語新講座5 運用Ⅰ』
河村清一郎、八角 真、石丸晶子、佐藤嗣男 1979『文章表現法』桜楓社
菊池康人 1987「作文の評価方法についての一私案」『日本語教育』63号
木下是雄 1990『レポートの組み立て方』ちくまライブラリー36、筑摩書房

留学生の意見文にみられる非一貫性の原因とその推敲の方法に関する考察（上）

- 木原 茂 1973「文章構成の基本的なパターン」『国文学』18-12 学燈社
言語技術の会編 1990『実践・言語技術入門—上手に書くコツ・話すコツ』朝日選書396 朝日新聞社
衣川隆夫 1994「日本人大学院生の文章推敲過程」The Language Teacher 18: 2
佐久間まゆみ 1983「段落とパラグラフ」『日本語学』2-2 明治書院
佐久間まゆみ 1990「文章構成の型と文脈の形成」表現学会編『表現学体系30』教育出版センター
鈴木英夫 1989「文章の構成」山口佳紀編『講座日本語と日本語教育5 日本語の文法・文体（下）』明治書院
西田直敏 1979「文章表現過程公式集」『国文学』24-8 学燈社
三樹精吉 1987「レポートの書き方」『言語表現法 文章の書き方と話し方』学燈社
森岡健二 1975「文章の構成法」『覆刻文化庁国語シリーズX 文章の構成・表現』文化庁
森岡健二 1977『文章構成法』至文堂
森岡健二 1989『文章構成法』東海大学出版会

- CERNIGLIA, Constance, MEDSKER, Karen & CONNOR Ulla 1990 “Improving Coherence by Using Computer-Assisted Instruction”. in CONNOR, Ulla & JOHNS Ann M. ed. *Coherence in Writing*. 1990: 227-241. TESOL
- CONNER, Ulla & FARMER Mary 1990 “The teaching of topical structure analysis as a revision strategy for ESL writers” in KROLL Barbara ed. *Second Language Writing*. 1990: 126-139. Cambridge University Press
- ENKVIST, Nils Erik 1990 “Seven Problems in the Study of Coherence and Inter-pretability”. in CONNOR, Ulla & JOHNS Ann M. ed. *Coherence in Writing*. 1990: 9-28. TESOL
- HALLIDAY, M. A. K. & HASAN, Ruqaiya 1976 *Cohesion in English*. Longman
- HINDS, John 1990 “Inductive, Deductive, Quasi-inductive: Expository Writing in Japanese, Korean, Chinese, and Thai in CONNOR, Ulla & JOHNS Ann M. ed. *Coherence in Writing*. 1990: 87-109. TESOL
- HINDS, John 1992 “Coherence in Japanese Expository Prose”. *Nagoya Gakuin Daigaku Gaiokugo Kyoiku Kiyo* No. 23
- HOEY, Michael 1991 *Patterns of Lexis in Text*. Oxford University Press
- LAUTAMATTI, Liisa 1990 “Coherence in Spoken and Written Discourse”. in CONNOR, Ulla & JOHNS Ann M. ed. *Coherence in Writing*. 1990: 29-40. TESOL
- MCCARTHY, Michael 1991 *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge University Press
- REID, Joy M. 1993 *Teaching ESL Writing*. New Jersey: REGENTS/PRENTICE HALL
- WIKBORG, Eleanor 1990 “Types of Coherence Breaks in Swedish Student Writing: Misleading Paragraph Division” in CONNOR, Ulla & JOHNS Ann M. ed. *Coherence in Writing*. 1990: 131-149. TESOL